

# 補文構造と認知——レトリカルな視点から

友 澤 宏 隆

## 1. 序説

補文構造 (complementation) の分析は個別言語の研究における主要な課題の一つであるが、特に英語の動詞や形容詞の補文——*that*, *wh* 語, *-ing*, *to* などの標識により導かれるもの——がどのような統語的・意味的性質を示すかということについては、生成文法や伝統文法の立場からの多くの理論的・記述的文法研究において種々の議論や提案が行なわれてきており、それは機能的・認知的な観点からの文法研究においても例外ではない<sup>(1)</sup>。機能文法・認知文法においては、さまざまな形の補文の分布の背後に仮定される各形式固有のスキーマ的意味およびそれら相互の関係、補文の形式とそれが表す意味の間の類像性 (iconicity) の解明などを中心とした研究が行なわれてきた<sup>(2)</sup>。本論考では、英語の動詞の補文構造の中で、特に *wh* 節補文に焦点を当て、*that* 節補文との関連も視野に入れつつ「シネクドキー (synecdoche, 提喩)」、*metonymy* (換喩) および「メタファー (metaphor, 隠喩)」などのレトリカルな概念に基づいてその認知構造の一端を明らかにすることを試みる。伝統的な修辞の手法という位置づけをはるかに越えて、言語の創造的な使用を動機づける主要なメカニズムとしての確固たる地位を与えられたこれらの認知的視点は、語彙的現象だけでなく重要な文法的現象の分析においてもその意義が認識されているが、本論考では補文形式の認知構造の探究を通して、言語現象におけるレトリックの遍在性を確認しレトリカルな視点からのアプローチの有効性を例証することを目標とする。以下において、2 節では動詞が *wh* 節補文をとる場合一般について検討し、それに続く 3 節では特定の動詞 (*find* と *find out*) が *wh* 節補文をとった場合について検討した上で、それぞれその認知構造について考察することにする。さらにそれとともに、ここで援用するレトリカルな視点のうち相対的に一般的認知度が低いと思われるシネクドキーとメトニミーについて、日本語の例などに基づいて理解を深めることにする。

## 2. 補文の認知構造 (1) ——シネクドキーとメトニミーの視点から

### 2.1 *wh* 節補文の分布

はじめに、動詞の補文としての *wh* 節および *that* 節の分布について確認しておくことにする。*wh* 節補文は *that* 節補文と同様多くの動詞がとる形式であるが、述語の動詞はその後にこの二つの補文形式をとれるかどうかに基づいて、次の三つのタイプに分類される (兼原・松山 2001, pp. 44-45) :<sup>(3)</sup>

- (i) *wh* 節のみを補文にとる述語動詞 : *ask, inquire, investigate, wonder* など
  - (1a) John wondered who Bill saw.
  - (1b) John wondered whether/if he should see Bill.
  - (1c) \*John wondered that he should see Bill.
- (ii) *wh* 節および *that* 節の両方を補文にとる述語動詞 : *decide, forget, know, remember* など
  - (2a) John knows where Mary went.
  - (2b) John knows whether/if Mary will go.
  - (2c) John knows that Mary will go.
- (iii) *that* 節のみを補文にとる述語動詞 : *assert, believe, claim, expect, think* など
  - (3a) John thought that Bill saw someone.
  - (3b) \*John thought who Bill saw.
  - (3c) \*John thought whether/if Bill saw John.

動詞による補文選択の可能性の相違には意味的な要因が関わっているが、一般に *that* 節補文を目的語としてとる動詞の多くは *wh* 節補文をもとることができ、また逆に *wh* 節補文をとる動詞の大半のものは *that* 節補文をもとるものであることが知られており、この両者の補文の分布には包含関係によって特徴づけられる密接な関係があることがわかる<sup>(4)</sup>。

### 2.2 *wh* 節補文の不確定性

述語動詞は *wh* 節補文および *that* 節補文をとれるか否かにより三つに分けることができるが、ここではこのうち両方の補文形式を選択できるもの (上の (ii) のタイプ) について考察をすすめていくことにする。これには上に挙げられたもののほかに、*predict, tell, find out* なども含まれる :<sup>(5)</sup>

(4a) I found out when she would leave.

(4b) I found out whether/if she would leave.

(4c) I found out that she would leave.

*wh* 節と *that* 節の両補文形式の意味に関して言えば、一般に *that* 節はその意味構造の中に「知識 (knowledge)」の要素を含み、「命題 (proposition)」を表すとされるのに対して、*wh* 節の意味的特徴は「不確定性 (indeterminacy)」であるとされる<sup>(6)</sup>。たとえば (4c) の場合であれば、*that* 節は「ある確定した内容をもつ命題」を表すが、(4a) (4b) の場合はそうではなく、*wh* 語の存在によって補文の一部分が不確定なものになっている<sup>(7)</sup>。これはさきに挙げた (1ab) (2ab) の場合も同様で、補文の内容は不確定な要素を含んだ形で提示されている。ここでこの「補文内容の不確定性」のあり方について少し詳しく検討を加えてみたい。たとえば (1a) (2a) (4a) について考えてみると、(1a) の場合、*who Bill saw* という補文節は *who* という不確定な要素を含み、「ビルが誰に会ったのか」明らかにされておらず、かつ主文の主語も主文の表す時点においてそれについて知っているというわけではない。これに対して (2a) (4a) の場合は、その補文はそれぞれ *where* および *when* という (1a) と同様の不確定な要素を含み、補文の内容は確定されていない形にはなっているが、この場合主文の主語は、(1a) とは異なり実はそれについての知識・情報をもっている（または獲得した）ことがわかる。主文主語は、たとえば (2a) の場合だと「メアリーの行き先」について実はすでに具体的に知っており、(4a) の場合だと「彼女が出かける／去る／やめる時」がいつなのかについて具体的な情報を得て知っているわけである。すなわちこれらの場合、補文節の表層においては *wh* 語という不確定要素の存在により補文の内容が確定性を欠く形で提示されているが、表層には現れていない主文主語の内部（すなわち、心の中）では補文の内容は確定しており、確定した知識（すなわち、命題——*that* 節補文の内容によって表されるもの）の形で存在しているということになる<sup>(8)</sup>。

このように、一般に「不確定性」によって特徴づけられる *wh* 節補文は、その補文の内容の不確定性のあり方に関して二通りの場合が存在する。ともに補文節の表層においては補文の内容は不確定的な部分を含んだ提示のされ方をしているが、主文主語の内部において補文の内容は実際には確定している場合とそうでない場合がある。これについて、Ransom (1986) は次のような補文構造の分析の枠組の中で論じている。Ransom (1986) は補文節の意味を「命題内容 (propositional content)」「情報モダリティ (information modality)」「評価モダリティ (evaluation modality)」の三つの構成要素に分け、それらの観点から種々の補文構造の意味を分類している<sup>(9)</sup>。そのう

ち「評価モダリティ」の一種である「不確定的評価 (indeterminate evaluation)」に関して、その場合の主文の述語の動詞を“Committed”のタイプのものと“Uncommitted”のタイプのものに分け、その相違について述べている。次の(5abc)(6)はそれぞれ“Committed”のタイプと“Uncommitted”のタイプの場合の例である(Ransom 1986, pp. 78-79)：

- (5a) I know whether Barry left.
- (5b) I predicted whether he would leave.
- (5c) I told Barry whether to leave.
- (6) I wonder whether Kyle locked it.

Ransom (1986) はこの両者の違いを次のように述べている。

- (7) Committed predicates imply knowledge or expectation about one of the alternatives in the complement proposition, but without conveying which one, while the Uncommitted predicates show no preference.

述語が“Committed”であるか“Uncommitted”であるかという区別は、主文主語が補文の内容の事実性に関してある決まった立場をとるかどうかということに関わるものであり、前者の場合は決まった立場をとるが後者の場合は決まった立場をとらないことになる。これは前者の場合、補文節が提示するいくつかの可能な選択肢のうち特定の(すなわち、確定した)一つについて主文主語が知識や期待をもっているが、後者の場合はそのような選択肢の確定は表さないということである。ただし前者の場合、提示される選択肢の可能性の中のどれなのかということについては補文節は直接には示さず、表層上はその内容が不確定な形で提示されているということである<sup>(10)</sup>。

### 2.3 *wh* 節補文とレトリック

2.2 では *wh* 節補文の不確定性のあり方について考察をすすめたが、ここではそれをレトリカルな視点から捉え直すことを試みることにする。伝統的な修辞の手法として確立していたレトリックの諸形式は、形式の追究を主体とする言語研究においては等閑視されていたが、これらは単に装飾的・技巧的な表現のみならず実はごく普通の日常的な表現の構成にも幅広く参与する、一般性が高く創造性に富む表現の方法であるという新たなレトリック観が共有されるようになり、その背後にある人間の認識のあり方を解明することが認知的な観点からの言語研究における主要な課題の一つであると位置づけられるようになっていく。認知言語学におけるレトリックの研究で特に注目に値するのは、従来形式的な規則や原理に基づいて説明されることが多かった文

法現象に対するレトリカルな視点からのアプローチであり、構文を中心とした種々の個別的現象の分析にいろいろな興味深い新知見がもたらされているが、ここではそのような方向性における考察の一環として、上でとりあげた動詞の補文構造の問題にレトリックの認知的視点がどのような分析を可能にするのかを追究していきたいと思う<sup>(11)</sup>。

### 2.3.1 *wh* 節補文とシネクドキー

レトリックには多様な形式があり、中でも類似性 (similarity) に基づく形式である「メタファー (隠喩)」はよく知られ認知言語学におけるレトリック研究においても中心的な地位を占めてきたものであるが、ここでまずとりあげたいのは「シネクドキー (synecdoche, 提喩)」と呼ばれるレトリックである。これは簡潔に定義すれば「包含関係 (類と種の関係) に基づいて転義 (意味のズレ) が起こる比喻で、上位概念で下位概念を指したり、下位概念で上位概念を指したりするもの」を言う<sup>(12)</sup>。このレトリックはその呼称とともに一般にはなじみが薄いものであるかもしれないが、日常言語の広範な表現に見られる主要なレトリックの形式の一つである。たとえば上位概念の表現によって下位概念が表されるのは次のような場合である：

- (8) 花見に行く／ホテルで式を行なう／焼き肉を食べる
- (9) 関西では単に「肉」と言えば普通は「牛肉」のことを指す
- (10) あそこのスタンドで給油しよう／今日は車が少ない
- (11) 彼は意識を失った／明日はニューヨークに飛ぶ予定だ
- (12) 空から白いものが降ってきた／目から熱いものが込み上げてきた

これらにおいて、下線部の表現 (の構成要素) はいずれも一般的なカテゴリーを表すが、実際に指し示されているのはそのカテゴリーの任意のメンバーではなくその中の限定されたメンバーであり、すなわちその上位概念の下に包摂される特定の下位概念ということになる。(8)の場合であれば「花見」の「花」、「式を行なう」の「式」、「焼き肉」の「肉」は通常はそれぞれ「桜」「結婚式」「牛肉または豚肉」のことを指す。(9)は地域の食生活に根ざしたそのような限定的な指示関係を説明した文である。(10)の場合、「給油」の「油」、「車が少ない」の「車」はそれぞれ「ガソリン」「タクシー」のことを指している (と意図されている)<sup>(13)</sup>。(11)の場合、「意識を失う」「飛ぶ」はそれぞれ「病気などで意識を失うこと」「飛行機に乗って行くこと」を指し、それ以外の場合 (たとえば前者の場合、単に「眠ってしまうこと」) を指すことはない。(12)の場合、迂言的な「白いもの」「熱いもの」はそれぞれ (ここでは)「雪」「涙」の

ことを指している<sup>(14)</sup>。他方、下位概念の表現によって上位概念が表されるのは次のような場合である：

(13) 下駄箱に靴をしまう／筆箱にはシャープペンを入れている

(14) 「動詞」がいつも「動作」を表すわけではない

(15) 済んだことを水に流す／転ばぬ先の杖

これらにおいて、下線部の表現（の構成要素）はいずれも具体的・特定の事物を現すが、実際に指し示されているのはその事物（に対応するカテゴリ）それ自体ではなくそれによって代表される一般的な事物であり、すなわちその下位概念を包摂する上位概念ということになる。(13)の場合、「下駄箱」とは「靴箱」のことであり、今日では後者の表現を用いることも多いが、「下駄」という「履物」の一種によって「履物一般」を指しているものである。「筆箱」は単に「筆」を入れるものではなく「筆記用具一般」を入れるためのものを指す。(14)の場合は、そのような名称とその指示対象との関係の実際についての注意を喚起した文である（「動詞」というポピュラーな名称だが、「動」だからといっていつも「動作」ばかりを表すとは限らず、「存在（および状態一般）」のように（狭義の）「動作」のカテゴリには属しないと見なされるものを表すこともある、ということである。この場合、「動詞が表すもの一般」が「動作」というそれに含まれるものによって代表されていることになる）。(15)の場合は慣用表現であるが、これらの表現は定型化された具体的な事例により象徴される一般的・抽象的な事柄を表すものであると言える（「水に流す」の場合は「それ以上問題にしないこと」を表し、「転ばぬ先の杖」は「困った事態にならないように、前もって準備や用意をしておくこと」を表す）<sup>(15)</sup>。

上で示した事例の検討から、「概念間の上下関係（包含関係、類と種の関係）」に基づくシネクドキー（提喩）は日常の言語表現に遍在する一般性の高いレトリックの形式であることが理解されたはずであるが、次にこの視点に立って2.2で論じた動詞の補文構造の一種としての *wh* 節補文の不確定性の問題を考えてみることにする。2.2の議論の要点は次の三つにまとめられる：

(16) 一般に *wh* 節補文は、その節の表層においては補文内容は（*wh* 語によって表される）不確定的な部分を含んだ形で提示される

(17) 主文主語が補文内容の真実性に関して決まった立場をとる場合、主文主語は実際には補文節が提示しうるいくつかの可能な選択肢のうちの特定の一つの選択肢を確定しているが、主文主語が補文の内容の真実性に関して決まった立場をとらない場合はそのような選択肢の確定はない

- (18) (17)において前者の場合、確定された選択肢の正体は補文節には明示されない（したがって表層上はその内容が不確定な形になっている）

*wh* 節補文が提示しうる可能な選択肢は (*that* 節補文の内容によって表されるような) 具体的な命題の集合であり, (17)の前者の場合その中から特定の選択肢が確定されるわけであるが, この場合その「可能な選択肢の集合によって構成されるカテゴリー」に対して確定された「特定の選択肢」はその中のメンバーであるので, カテゴリーとそのメンバーの包含の関係に基づく一種のシネクドキーの関係が成立していると思なすことができる。ただしこの場合, 上に挙げたシネクドキーの諸例とは重要な点で相違があることに注意すべきである。すなわちさきに見た諸例の場合は, シネクドキーの指示関係が一般にアクセス可能であり, 表現者はもちろん表現の受け手もその関係の内容を把握することができるが, この *wh* 節補文に関して提案されたシネクドキーの関係においては, その確定された「特定の選択肢」の正体は主文主語がもっている知識の一部ではあっても, (主文主語と異なる) 表現者および表現の受け手を含むそれ以外の人はそれに対してアクセスすることが原理的に不可能であるということである。たとえば (2b) の場合だと, 「メアリーの具体的な行き先」(すなわち, メアリーの行き先についての可能な選択肢の集合の中から確定されたもの) は主文の主語であるジョン以外は原理的には知りえないものであり, (8)–(15)のようなその指示関係が「一般に」把握可能な一般のシネクドキーの場合とは根本的に異なるということである。すなわちこの場合, シネクドキーの表現の適用対象となる領域は「主文主語の内部(すなわち, 心の中)」というきわめて限定された範囲に留まるということである。このような, その関係への一般的アクセスが原理的に不可能であるという認知的特性は, そうしたシネクドキー形式を含む表現が, その使用に特別な表現行動上の目的を伴ったり, それが生じる極性が限定される傾向が見られたりすることと関わりがある<sup>(16)</sup>。たとえば Dixon (2005) は, *know, hear, understand, remember, decide, remark* などの動詞が *wh* 節補文をとる場合, *wh* 節補文は *that* 節補文とは異なり, 次のように主文が否定文の場合に用いられるのが典型的であると述べている (同書 p. 238) :

- (19) I don't know whether John is on duty today.

また Huddleston and Pullum (2002) は, *wh* 節補文において *whether/if* が補文標識である場合, 否定文であれば問題はないが肯定文だと容認可能性が低くなると述べている (同書 pp. 981–982) :<sup>(17)</sup>

- (20a) He doesn't know whether it is ready.

- (20b) ?He knows whether it is ready.

(21a) She didn't say if the door was locked.

(21b) ?She said if the door was locked.

この理由は、否定文の場合は主文主語が補文の内容の真実性に関して決まった立場をとらず、したがってもし肯定文の場合であれば主文主語において確定されるはずの「特定の選択肢」の確定が生じないことになり、よって一般的アクセスが原理的に不可能である（一種の危うさをかかえた）シネクドキー関係から解放されることになってその分だけ表現の生成上の安定性が増すからであると考えられる。そのような不安定なシネクドキー関係の非存在が安定的な表現生成に貢献していると考えられる他の例として、*wh* 節補文をとる動詞が非定形である次のような場合が挙げられる：

(22) Let us place pragmatics within linguistics and see what that implies.

(23) They want to learn whether their daughter is still alive.

(24) I tried to find out whether the drug had any effect.

これらにおいて、*wh* 節補文をとっている動詞は、もし定形でありかつ肯定形であればその主語（主文主語）が補文の内容の真実性に関して決まった立場をとるタイプのものであるが、この場合はそうではないため、主文主語は実際には補文節が提示する可能な選択肢の中の特定の選択肢を確定しておらず、補文内容は（単に表層だけでなく）実際においても不確定であり、ここで規定されたような不安定なシネクドキーの関係は成立しない<sup>(18)</sup>。

以上の考察から、動詞の補文構造の一種としての *wh* 節補文における補文内容の不確定性の問題には、遍的なレトリックの一形式であるシネクドキーの要素が関わっていると見なすことができると考えられるが、この場合のシネクドキーの関係は上述のような意味において不安定な側面を含んだものであり、その不安定性を回避しているように見える極性や定形性の点において特化した表現の存在が確認できることがわかる。

### 2.3.2 *wh* 節補文とメトニミー

上では *wh* 節補文をシネクドキーの観点から追究することを試みたが、次にこれを同じレトリックの一形式として確立している「メトニミー (metonymy, 換喩)」の視点から考察していきたいと思う。メトニミーとは簡潔に定義すれば「単一の概念領域内における隣接性 (contiguity) に基づく比喩」のことであり、わかりやすく言えば「本来はある事物を指し示す表現が、それと同一の概念領域に属する（よってその事物と近い関係にある）別の事物を指し示すこと」であると言える<sup>(19)</sup>。メトニ

ミーもシネクドキーと同様、日常言語に遍在し広範な事例を包括する重要なレトリックの形式の一つであり、種々のタイプのものが見られる。次にいくつか例を見ておくことにする：

- (25) 車を洗う／目鼻立ちが整っている
- (26) お風呂が沸いている／ビール瓶3本飲んだ
- (27) チョムスキーはチンプンカンプンだ／チャイコフスキーが食べたい
- (28) ワシントンは声明を発表した／小平から国立に進学する
- (29) 英語の母語話者／包餃子

これらの場合、下線部の表現（の構成要素）はそれが本来指し示す事物と同一の概念領域に属する別の事物を（実際は）指していると理解することができる。(25)の場合、「車」とは「車一台のすべて」ではなく「車の外側」というその一部分を指す。また「目鼻立ち」とは慣用的に「顔立ち」のことを指し、「顔」の代表的な構成要素であり、ゆえに「顔」の印象を決定する上で重要な役割を果たす「目鼻」によって「顔全体」を指す表現になっている。この二つの例の場合、「全体」と「部分」の指示関係に関わるものである。(26)の場合、それぞれ「お風呂の水」「ビール瓶3本のビール」を指す。これらは「容器」とその「内容」との指示関係に関するものである。(27)の場合、「チョムスキー」「チャイコフスキー」はそれぞれ「チョムスキーの（専門的）著作」「その素材にチャイコフスキーの音楽を聞かせてピロシキを作っているピロシキ屋のピロシキ」を指し、それぞれ「作者」と「作品」、および「製造の手段（の目玉として意図されているもの）」と「その手段によって製造されたもの」の間の指示関係の例である。(28)の場合、「ワシントン」は「ワシントンに所在する米国政府」を指し、「小平」「国立」はそれぞれ、「東京都小平市にあった一橋大学の前期課程」「東京都国立市の同大学の後期課程」を指す<sup>(20)</sup>。これらは「場所」と「その場所に存在する機関」に関わる指示関係である。(29)において、「話者」は（通常は）単に「話す」だけの人ではなくそれ以外の言語技能（聞く・読む・書く）も（母語として普通に）行使できる人のことを指している。また「包餃子」は中国語の表現で、この「包」は単に餃子を包むだけではなくそれを含めた「餃子を作る」という作業の総体を指して言っている。これらの場合、「同一の行為の一つの側面／関連する行為群の中の一つの行為」によって「その行為の全体的な面／その行為群の全体」を指し示すという関係になっている。

上で示した事例によって、メトニミーとして分類されるレトリック表現の日常性と多様性の一端を垣間見ることができたはずであるが、この視点は *wh* 節補文の表現の構成にどのような関わりをもちうるであろうか。これについて考察するための基盤とな

るのが、*wh* 節補文が示す志向性の相違について指摘した Huddleston and Pullum (2002) の議論である。Huddleston and Pullum (2002) によると、*wh* 節補文はそれが生起するコンテキストの種類によって「問志向 (question-orientation)」をもつものと「答志向 (answer-orientation)」をもつものに分類される (同書 p. 981) :

(30a) She asked where he lived.

(30b) He told her where he lived.

(31a) She wanted to know/didn't know where he lived.

(31b) She knew where he lived.

(30a) (31a) は前者のタイプのものであり、(30b) (31b) は後者のタイプのものである<sup>(21)</sup>。後者の場合、主文主語は補文節が提示するいくつかの可能な選択肢のうちの特定の一つの選択肢を確定しているが、前者の場合はそのような選択肢の確定はなされておらず、そうした選択肢の確定の有無がこのような志向性の違いと対応するものである。*wh* 節補文はこのようにその志向性のあり方によって二分されるのであるが、この場合注意すべきことは、*wh* 語という不確定的な内容をもつ要素によって特徴づけられるという *wh* 節補文の本来的な性質から、それと「問志向性」との結びつきは自然な (一次的な) ものであると見なされるが、それと「答志向性」との結びつきはその「問志向性」との結びつきから見れば二次的なものであり、「問」に対する「答」という関連する事態の連鎖の存在に由来するものであると考えられるということである。すなわち、(30b) (31b) のような「答志向」の *wh* 節補文は、「問」と「答」というメトニミックな事態間の関係を基盤にして成立しているものであるということである。事態間関係のメトニミーには、この他に「原因」と「結果」に関わるメトニミーが知られているが、「問」と「答」に関わるメトニミーもそうした「因果関係」に関わるものと同列に位置づけられうるものであると言えるであろう<sup>(22)</sup>。この「問答」のメトニミーは、*wh* 節補文と分布上の対応関係を示すとされる次のような「潜伏疑問文 (concealed question)」の表現構成にも関わりをもつと考えられる (Huddleston and Pullum 2002, p. 976 ; 栗原・松山 2001, p. 47) :

(32) I can't remember the kind of pizza she likes.

(33) Can you tell me the time?

(34) James figured out the plane's arrival time.

(35) Fred tried to guess the amount of the stolen money.

上の例において、下線部は定名詞句の形になっているが、これらは間接疑問文の一種で、次のような *wh* 節の補文に相当するものであるとされる :

- (36) I can't remember what kind of pizza she likes.  
 (37) Can you tell me what time it is?  
 (38) James figured out what the plane's arrival time would be.  
 (39) Fred tried to guess how much money had been stolen.

この(36)–(39)において、(36) (37) (39)は「問志向」で、(38)は「答志向」であり、後者の場合は「問答のメトニミー」に基づくものであるということになるが、この(36)–(39)が(32)–(35)——潜伏疑問文の形を含むもの——と等価の内容を表すとすれば、これに対応して(32) (33) (35)は「問志向」、(34)は「答志向」ということになる。この(32)–(35)は「問答のメトニミー」の視点から見るとどのようになるであろうか。これらにおいて、下線部の潜伏疑問文は名詞句であるが、一般に「名詞」というのは「モノ」を表し、それは典型的には個性をもった存在（可算名詞に対応するもの）である<sup>(23)</sup>。「名詞」がもつこのような一般的意味の特徴から、(32)–(35)の下線部の名詞句は第一義的には「特定の個体」と指示関係を結ぶと見なすのが妥当であり、これはこの場合（いくつかの可能な選択肢の中から）「確定された特定の選択肢（と対応するもの）」ということである。これは「問答」の事態連鎖においては「答」の項であるから、もしこれらの中で（「答志向」ではなく）「問志向」のものがあるならば——(32) (33) (35)がそれに該当するのであるが——それは「問答」のメトニミーに基づいたものであるということになる。「問答のメトニミー」は(36)–(39)のような *wh* 節補文の場合のみならず(32)–(35)のような潜伏疑問文の場合においてもその表現の構成に関与するということであるが、ここで注意すべきなのは「問志向」と「答志向」という志向性の相違との関係において両者には違いが見られるという点である。「問志向」のものと「答志向」のものうち、*wh* 節補文の場合には後者のほうがメトニミックなものであるということになるが、潜伏疑問文の場合には前者のほうがメトニミックなものであるということになる。

以上の考察から、*wh* 節補文およびそれと関連する潜伏疑問文の表現は、「問志向」と「答志向」という志向性の違いの観点から捉えられ、その構成において「問」と「答」という事態連鎖に基づくメトニミーの関与が認められると捉えることができることがわかる。このメトニミックな関係は、さきに論じたシネクドキーとも密接な関わりをもつものであり、*wh* 節補文および関連する形式の認知構造のありさまに対してレトリカルな光を照射するものであると言えよう。

### 3. 補文の認知構造 (2) ——メタファーの視点から

前節では、動詞の補文構造としての *wh* 節補文を中心に、種々の例におけるその表現の構成のあり方をシネクドキーとメトニミーというレトリカルな認知的視点から考察し、その認知構造の一端を解明することを試みた。本節では補文をとる個々の英語の動詞の中で、英語学習者にも当惑をもたらすことがある *find* および *find out* をとりあげ、それらが *wh* 節補文をとった場合について検討し、関連する *that* 節補文の場合も検討しながら「メタファー (隠喩)」の視点との関連でその認知構造上の特徴を明らかにすることを試みる。

#### 3.1 *find* および *find out* と補文形式

はじめに *find* も *find out* と *wh* 節補文および *that* 節補文との共起可能性について見ておくことにする。これらの動詞はともに「発見」に関わる意味を有するという点では共通しているが、*wh* 節補文を自然な形としてとりうるか否かに関して両者の間には差異が見られる：

- (40) I found out when she would leave. (=4a)
- (41) I found out what he was thinking about.
- (42) I'll just find out who you need to speak to. (Carter and McCarthy 2006, p. 513)
- (43) ?I found when she would leave.
- (44) ?I found what he was thinking about.
- (45) ?I'll just find who you need to speak to.

これらにおいて、*find out* を用いた(40)―(42)にくらべて、*find* を用いた(43)―(45)は容認可能性が低くなる<sup>(24)</sup>。それに対して、これらが *that* 節補文をとった場合は、*find* を用いたものも一般に容認可能性に問題はなくなる：

- (46) I just found out that the payment is due tomorrow. (*NHDAE*)
- (47) I recently found out that she's over forty. (マケーレブ/マケーレブ 2006)
- (48) We found out later that we had been at the same school. (*OALD*<sup>6</sup>)
- (49) I find that it pays to be honest. (*OALD*<sup>6</sup>)
- (50) The report found that 30% of the firms studied had failed within a year.

(OALD<sup>6</sup>)

(51) I was disappointed to find that they had left already. (OALD<sup>6</sup>)

このようなデータに基づき、以下ではまずこれらの動詞が *that* 節補文をとった場合について検討し、それに基づいて *wh* 節補文をとった場合の両者の容認可能性の差異の背景および *wh* 節補文の認知的特徴について考察することにする。

### 3.2 *find* および *find out* の意味のスキーマとメタファー

(46)–(51)において、(46)–(48)は *find out* の例、(49)–(51)は *find* の例で、*that* 節補文は「確定した内容」を表しているが、前者の場合、*just*, *recently*, *later* の各副詞がそのニュアンスをよく表しているように、「それまで自分にはまったく知られていなかった事柄が、あるときに表面化する／事実であることを知る／事実であることがわかる」という意味的な共通性が存在すると言える。そうした表面化にいたるまでの過程で質問や調査などが行なわれることもあれば、または偶然それが表面化するということもある。(48)などは、そのことが何かのときに偶然話に出たか、または偶然何かで知ったというような状況を想像させる。これに対して後者の場合は、「(それがどのような形によるものかは別にして) ある事柄に表面的に接する (ことによってそれを知る)」という意味的共通性を指摘することができる。(49)の場合は試行・経験の結果そのような事柄に接したのであり、(50)の場合は調査・研究の結果そうした事柄に接した (それを発見した) のである。(51)の場合は別に経験や調査によるのではなく、偶然そうした予期せぬ事柄に接したわけである。*find out* の場合と *find* の場合のこのような意味的特徴の相違は、両者の構成要素上の違いである副詞 *out* の存在に帰することができると考えられる。Lee (2001) によると、この不変化詞はその中核的な意味として「ある存在物がある容器 (容器状の空間) の外に位置している関係」を表すが、その場合、その「容器」が観察者には接近不可能 (inaccessible) であることがあり、その「存在物」がそうした接近不可能な領域から観察者の「知覚の範囲 (perceptual field)」に出現したものと見なされることがある (同書 pp. 31-33)。次のような例がそれに相当する (同書 pp. 32-33) :

(52) The sun is out. /The stars are out.

(53) The sun came out. /The stars came out.

(52)は「存在物が出現している」という「状態」を表し、(53)は「存在物の出現」という「状態変化」を表す。そしてこの物理的な「知覚の範囲」は、「認識の範囲 (cognitive field)」にメタファー写像され、「対象の事物の、人の認識の範囲への出現」

を表すことになる。これはすなわち、「それまで未知であった事柄が人に知られるようになる」ということである。次のような例がそれに相当する（同書 p. 33）：

(54) The news is out. /The secret is out. /The cat is out of the bag.

(55) He spoke out. /He threw out a few ideas. /I worked out a solution to the problem. /I found out the truth.

上の最後の例に現れているように、*find out* はこのような異なる領域間に関わるメタファーの作用の結果としてその意味が生成されていると考えることができる。

### 3.3 *find* および *find out* と *wh* 節補文との親和性、

#### および *wh* 節補文の認知的特徴

上の考察から、*find* および *find out* の意味のスキーマは次のようにまとめられる：

(56) *find*：ある事柄に表面的に接触してそれを発見する

(57) *find out*：それまで未知の領域にあったある事柄が表面化してそれを発見する

これらの *find* および *find out* の意味的特徴づけに基づいて、この両者が *wh* 節補文をとった場合の容認可能性の違いについて考えてみたいと思う。前節で見たように、*wh* 節補文は *wh* 語という不確実な要素の存在により不確定的な部分を含んだ形で提示された内容を表すために、「問志向性」と自然な結びつきをもち、またそれが「問答のメトニミー」により「答志向性」をもつことにもなりうるが、この、*wh* 節補文に関わる「問答」はどのように捉えることができるであろうか。もし「問う対象」の候補がはじめから直接観察可能な範囲に存在することが知られているならば、直接観察によりそれと表面的に接触することによってその対象（すなわち、「答」）を得ることができるので、そもそも発問自体が行なわれず、「問答」の生じる余地はない。したがって、「問答」は、「問う対象」が最初から直接観察可能な範囲には存在せず、直接には接近可能ではない領域に存在していることが前提となると思われる。*wh* 節補文に関わる「問答」というものをこのように捉えると、さきに見た *wh* 節補文と *find* および *find out* との親和性の程度差を説明することができると思われる。*find* は(56)に述べたように対象との「表面的な接触による発見」を表すものであり、それは見方を変えれば、対象が（直接観察などにより）表面的に接触することが可能な領域に存在する（と捉えられる）ことを示唆するものであると考えられるので、*wh* 節補文の関わる「問答」における「問う対象」の存在領域に関する前提にかなうものではなく、よって

*wh* 節補文がそれと組むことには抵抗を伴うと考えられる。これに対して、*find out* は(57)で述べたように「未知の領域にあった事柄の表面化による発見」を表すものであり、それは対象が（直接観察などによって）直接にそれと接近することが可能ではない領域に存在する（と捉えられる）ことを示すものであると考えられるので、*wh* 節補文の関わる「問答」における「問う対象」の存在領域に関する前提にまさしく合致するものであり、*wh* 節補文はそれと自然な結びつきをもつことができると考えられる。このように、*wh* 節補文が関わる「問答」の本質を認知的に適切に捉えることにより、*find* および *find out* がこの補文形式をとった場合の容認可能性の差異、すなわち両動詞と同補文形式との親和性の程度差に対して妥当な説明を与えることができると考えられる。

#### 4. 結語

本論考では、英語の動詞の補文構造の中で *wh* 節補文に焦点を当て、レトリカルな視点に立ってその認知構造上の特徴を明らかにすることを試みた。動詞の補文構造に関する認知的研究はすでに数多いが、*wh* 節補文をめぐる諸問題に対する本論で提示したアプローチは、言語現象におけるレトリックの遍在性をあらためて確認するものであると同時に、従来形式的な規則や原理に基づいて説明されることが多かった文法現象の分析におけるレトリカルな視点の有効性に対する新たな例証を提供し、同様の視点に立った文法研究の進展を促すものであると思われる。すでに論じつくされた感もあるにもかかわらずなお本格的な探究を待つ事象も少なくない動詞の補文構造の問題は、新しいレトリック観の共有を基盤とした認知言語学研究の新展開が期待される領域の一つであると言えるであろう。

#### 注

\* 本論考をまとめるにあたって西村義樹氏（東京大学）および三瓶裕文氏（一橋大学）から有益なご教示をいただいたことに感謝の意を表したい。

1. 以下で単に「補文（形式／構造）」と言うときは、英語における補文（形式／構造）のことを指すものとする。
2. たとえば Dixon (2005, pp. 238-259), Duffley (1992), Givón (1993, pp. 1-44), Langacker (1991, pp. 438-463), Taylor (2002, pp. 428-433), Verspoor (2000), Wierzbicka (1988, pp. 23-168)などを参照。

3. *if* は形態上 *wh* 語ではなく、*whether* とは分布上および意味上相違があるが、本論では動詞の補文を導く *whether* と交替可能な場合のものを扱い、*whether* と同様の機能をもつものとして扱う。本論で「*wh* 節」と言う場合は、この *if* によって導かれる節も含めるものとする。
4. Quirk et al. (1985, p. 1184), Dixon (2005, p. 239) および Berk (1999, p. 259) を参照。*wh* 節・*that* 節を補文としてとる動詞の意味的カテゴリーについては、吉田 (1995, p. 133), 中島 (編) (2001, pp. 293-294, 317), Bresnan (1979, pp. 62-77), Quirk et al. (1985, pp. 1179-1184), Huddleston and Pullum (2002, p. 976), Dixon (2005, pp. 238-240), Berk (1999, pp. 228, 259) などを参照。また動詞による補文選択の可能性の相違に関与する意味的な要因に関して、Givón (1993) によると「知覚・認識・発話動詞 (perception-cognition-utterance verbs)」のうちの一部のものが *that* 節補文のほかに *wh* 節補文もとり、また *wh* 節補文をとる動詞のすべては「認識的 (epistemic) 意味」に関わる動詞 (すなわち知識や確信に関わる動詞) である (同書 p. 252)。他方、*wh* 節補文をとらない動詞の多くは「好み (preference)」に関わる動詞 (*wish, hope* など) であるが、そのカテゴリーには属さない *say* や *think* も *wh* 節補文をとらないので、“epistemic” vs. “preference” の区別だけでは *wh* 節補文の分布を説明できないとのことである (同書 p. 252)。
5. Quirk et al. (1985), Huddleston and Pullum (2002), および Carter and McCarthy (2006) は *find out* を *wh* 節をとる動詞のリストには含めているが *that* 節をとる動詞のリストには含めていない (Quirk et al. 1985, pp. 1181, 1184, Huddleston and Pullum 2002, pp. 958, 976, Carter and McCarthy 2006, pp. 511-513)。しかし実際には *find out* はごく普通に *that* 節を補文としてとることが可能である (小西 (編) 1980, pp. 566-567, マケレーブ/マケレーブ 2006, p. 306, *OALD*<sup>6</sup> “find out”)。また、*find out* の後に *wh* 節が来る場合、直接 *wh* 節をとる場合の他に「前置詞 *about* + *wh* 節」の形をとる場合もあるが、この前置詞の有無は意味的な変化を生じさせるものではないという (八木 1999, pp. 234-235)。このように、動詞が *wh* 節をとる場合、前置詞のついた形にするか否かが任意である動詞は他にもあるが、前置詞の有無によって多少意味に違いが生じるものもある。Quirk et al. (1985, p. 1185) を参照。
6. 乗原・松山 (2001, pp. 18-19, 44-47), Bresnan (1979, pp. 62-77) および Wierzbicka (1988, pp. 132-140) を参照。
7. Bresnan (1979) の次の指摘を参照：“In a sense, WH ‘undetermines’ a particular part of the complement it governs.” (pp. 65-66)
8. Dixon (2005) では *wh* 節の補文は「断定可能な活動や状態のある側面を表し、それに関して明確化 (clarification) が必要とされる」と述べられているが (同書 p. 258), 例 (1ab) の場合はその明確化の対象となる事項がその時点において不確定であり、したがって今のところは明確化することができないのに対して、(2ab) (4ab) の場合はその時点においてそれが確定しており、明確化しようと思えばできることになる。
9. 詳細については、Ransom (1986) の各章、特に Chapter I から Chapter IV を参照。
10. Berk (1999) の次の指摘を参照：“...they (i.e. *wh* words) do have referents, even though those referents are not specified in the sentence.” (p. 256); “...*wh* words in *wh* clauses usually have a specific, but unspecified, referent. If I say, “I know who Yvette is dating,” *who* refers to a specific individual.” (p. 259)

11. 文法現象とレトリック (特にメトニミー (換喩)) に関しては, 西村 (2002), 西村 (2004) および Nishimura (2003) などを参照。
12. 辻 (編) (2002, pp. 158-159) を参照。
13. この2番目の例は, 筆者が以前タクシーに乗ったときにそのタクシーの運転手から聞いたものである。この場合, 最初は解釈に戸惑ったが, その意味するところは「いつもならばタクシーがたくさん停まっている駅前広場だが, 今日は停まっているタクシーの数が少ない」ということであった。このように, 上位概念が下位概念を指し示すと言ってもそれが言語の構造の中で慣習化されているのではなく, 当該の表現の使用のコンテキストに依存しており, そのコンテキストを共有していないと解釈困難な場合がある。
14. この場合, 「白いもの」は「雪」のことを指すが, この表現がつねにこの指示対象に限定されるわけではない。たとえば「頭に白いものが目立ってきた」と言えば, 「白いもの」は「雪」ではなく「白髪」を指すと解釈される (辻 (編) 2002, p. 158)。これもさきほどの「車」の例と同様表現が用いられる文脈によって指示関係が決まってくる場合であるが, 「車」の例とは異なり, 通常の解釈に困難が生じる余地は少なく, 表現の指示関係の慣習化の度合いは高いと言える。
15. シネクドキー (提喩) について, 従来知見の蓄積の上に立ち独自の視点から新たに分析を進展させたものとして森 (1998) および森 (2004) がある。
16. Bresnan (1979) は話者の発話意図との関連で, 「WH 補文はある種の (確定した) 情報の提示を控えたり, 隠匿したり, あるいは故意に未定の状態にしておいたりする場合にしばしば用いられる」と述べており, 次の例を示している (同書 p. 68): *I know who's to blame (but I won't tell you)*. 補文の内容は実際には確定しているのだが, 表層上は不確定な状態であるため, それを利用して自らの表現行動の目的の達成をはかろうとするものである。また, *wh* 節補文はそれが生じる極性が限定される傾向があるということに関しては, すぐ後に述べるように主文が否定文の場合に用いられることが多いということであるが, これに関して Quirk et al. (1985, p. 1184) は *wh* 節補文をとる動詞の中で, その多くが否定を含む非断定的なコンテキストに生じる傾向があることを示している。
17. ただし, Huddleston and Pullum (2002) によると, 補文標識が *whether* や *if* 以外の場合は, 肯定文と否定文という極性の違いによる容認可能性の差は問題にはならないという (同書 p. 982)。これは, *wh* 節補文が提示しうる可能な選択肢の数が限定されているかどうかに基づくものであると言える。
18. これらの場合, *wh* 節補文をとっている動詞は「未実現の事態」を表すが, そのような「事態の未実現性」が *wh* 節補文に関わる「選択肢の不確定性」と相関している。なお, (23) (24) の *to* 不定詞が未実現の事態を表すことについては Duffley (1992, p. 19) を参照。また (24) において, *wh* 節補文を導いている動詞 *find out* はここでは「(調査の後) ある事柄を発見する」の意味であるが, 次の場合はそのような「発見」それ自体よりもむしろその前提となる「調査行為」の意味に近いという (小西 (編) 1980, p. 565): *Please find out when the train starts*. ここで, 「調査と発見」というのは「(事態の) 過程と結果」の一例として捉えることができるが, このような「過程と結果」という時間的に連続した緊密な関係にある事態に関わる意味の焦点化の交替は, 次で扱う「事態連鎖に基づくメトニミー」による動詞の多義の問題として考えることができる。この場合, 多義の発生には動詞が生じる統語的な環境が関係しており, たとえば今の例では非定形の動詞 *find out* は命令形であ

り、「発見」という「結果」に至る「調査」という「過程」の意志的な始動に焦点が置かれているが、さきほどの(24)の例の場合は *find out* は *try to* の後に置かれ、この主動詞 *try* が「結果」に至らせるまでの「過程（において払われる努力）」をもっぱら表すために不定詞内の動詞は「結果」に焦点が置かれるということになる。このような事態の「過程 (process)」と「結果 (result)」の観点から種々の語彙的・文法的動詞の意味構造を分析した研究としては Tobin (1993) が参考になる。

19. 辻 (編) (2002, pp. 35-36) を参照。
20. この「小平」と「国立」の指示関係の例は、同じ機関の関係者（この場合は同大学の学生・教職員等）の中で局所的に通用するものであり、したがって注 13 で説明した例の場合と同じく一般性をもつものではない。このような指示関係の表現の使用・理解が、ある者の言語慣習の一部として組み込まれていることは、その者がその機関に属する者であることを示す一つの指標となる。これは、ある「地域的方言」と「その地域の出身者」との関係と同じである。
21. ここで「問志向」対「答志向」という「志向性」の観点から捉えているのは、この場合発話行為としての「問答」が実際に遂行されたことを必ずしも保証するわけではないということによっている。この例において、(30ab) の場合は、現実の問答行為の報告であり、“Where do you live?” “I live in...” といったやりとりが交わされたことを前提としたものであると言えるが、(31ab) の場合はそのような保証はなく、そのような問答は単に仮構されただけのものであってもかまわない。Huddleston and Pullum (2005) は、*wh* 節補文は *wh* 節が主節である場合と異なり、それ自体問を「発する (ask)」のではなく（単に）問を「表す (express)」ものであると述べている（同書 pp. 177-178）。そして *wh* 節補文は通常、“the answer to the question”+*wh* 疑問文の形で言い換えることができるとしている：*I know where he is.* → “I know the answer to the question ‘Where is he?’” なお、Swan (2005, p. 250) も参照。
22. 「原因」と「結果」に関わるメトニミーとしては、「その店は（大変売れ行きがよくて）笑いが止まらない」や「そのとき私は（とてもつらくて）泣きたいくらいだった」などが挙げられる。これらにおいて、括弧内は「原因となる事態」を表し、括弧以外の部分は「結果の事態」を表すが、表現される場合は括弧以外の部分だけで生じることが多く、その場合は「因果関係」のメトニミーによって括弧内の事態を表すものと見なされる。
23. Langacker (1991, Chap. 1), Berk (1999, pp. 56-57) などを参照。
24. 注 5 に記したように、Quirk et al. (1985), Huddleston and Pullum (2002), および Carter and McCarthy (2006) では *find out* は *wh* 節をとる動詞のリストに含まれているが、*find* はそのリストに含まれていない (Quirk et al. 1985, p. 1184, Huddleston and Pullum 2002, p. 976, Carter and McCarthy 2006, pp. 512-513)。小西 (編) (1980) は *find* は *wh* 節をとりうるとしているが、その場合は「調べる」という意味に近くなり、*find* よりも *find out* のほうがよく用いられると述べている (小西 (編) 1980, p. 565, 注 18)。また、『ジーニアス英和辞典 第 3 版』では *find*+*wh* 節が認められているが、『新グローバル英和辞典 第 2 版』および *OALD*<sup>6</sup> では認められていない。

## 参考文献

- 木原研三（監）・山岸和夫（編）（2001）『新グローバル英和辞典 第2版』東京：三省堂。
- 乗原和生・松山哲也（2001）『補文構造 英語学モノグラフシリーズ4』東京：研究社出版。
- 小西友七（編）（1980）『英語基本動詞辞典』東京：研究社出版。
- 小西友七・南出康世（編）（2001）『ジーニアス英和辞典 第3版』東京：大修館書店。
- 辻幸夫（編）（2002）『認知言語学キーワード事典』東京：研究社。
- 中島平三（編）（2001）『最新英語構文事典』東京：大修館書店。
- 西村義樹（2002）「換喩と文法現象」西村義樹（編）『認知言語学Ⅰ：事象構造 シリーズ言語科学 第2巻』東京：東京大学出版会，285-311。
- 西村義樹（2004）「換喩の言語学」成蹊大学文学部学会（編）『レトリック連環 成蹊大学 人文叢書2』東京：風間書房，85-108。
- ジャン・マケーレブ／マケーレブ恒子（2006）『動詞を使いこなすための英和活用辞典』東京：朝日出版社。
- 森雄一（1998）「提喩についての一考察」『明海日本語』4：49-57。
- 森雄一（2004）「問題群としてのレトリック」成蹊大学文学部学会（編）『レトリック連環 成蹊大学 人文叢書2』東京：風間書房，61-83。
- 八木克正（1999）『英語の文法と語法 意味からのアプローチ』東京：研究社出版。
- 吉田正治（1995）『英語教師のための英文法』東京：研究社出版。
- Berk, Lynn M. (1999) *English Syntax: From Word to Discourse*. New York/Oxford: Oxford University Press.
- Bresnan, Joan W. (1979) *Theory of Complementation in English Syntax*. New York/London: Garland.
- Carter, Ronald and Michael McCarthy. (2006) *Cambridge Grammar of English: A Comprehensive Guide*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Dixon, Robert M. W. (2005) *A Semantic Approach to English Grammar*, 2nd ed. Oxford: Oxford University Press.
- Duffley, Patrick. (1992) *The English Infinitive*. London: Longman.
- Givón, Talmy. (1993) *English Grammar: A Function-Based Introduction*. Vol. II. Amsterdam: John Benjamins.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. (2002) *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. (2005) *A Student's Introduction to English Grammar*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Langacker, Ronald W. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar*. Vol. II. Stanford: Stanford University Press.
- Lee, David. (2001) *Cognitive Linguistics: An Introduction*. Oxford: Oxford University Press.
- Nishimura, Yoshiki. (2003) "Conceptual Overlap in Metonymy," in Masatomo Ukaji, Masayuki Ike-Uchi and Yoshiki Nishimura (eds.), *Current Issues in English Linguistics*. Tokyo: Kaitakusha, 165-190.

- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Ransom, Evelyn N. (1986) *Complementation: Its Meanings and Forms*. Amsterdam: John Benjamins.
- Rideout, Philip M. (ed.) (2000) *The Newbury House Dictionary of American English. (NHDAAE)* Boston: Heinle & Heinle.
- Swan, Michael. (2005) *Practical English Usage*, 3rd ed. Oxford: Oxford University Press.
- Taylor, John R. (2002) *Cognitive Grammar*. Oxford: Oxford University Press.
- Tobin, Yishai. (1993) *Aspect in the English Verb: Process and Result in Language*. London: Longman.
- Verspoor, Marjolijn. (2000) "Iconicity in English complement constructions: Conceptual distance and cognitive processing levels," in Kaoru Horie (ed.), *Complementation: Cognitive and functional perspectives*. Amsterdam: John Benjamins, 199-225.
- Wehmeier, Sally. (ed.) (2000) *Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English*, 6th ed. (*OALD<sup>6</sup>*) Oxford: Oxford University Press.
- Wierzbicka, Anna. (1988) *The Semantics of Grammar*. Amsterdam: John Benjamins.